

平成24年度第1回学術講演会（講演抄録）

## 中国明清時代の文学と商業

### Literature and Commerce in the Ming and Qing China

講師 大 木 康

（東京大学東洋文化研究所教授・所長）

本講演は、以下の三つの部分によって構成される。

- （一）中国明清時代の概説並びに当時の商業について
- （二）明清時代の文学作品に見られる商人について
- （三）明清時代の文学と商業との関係について

#### （一）中国明清時代の概説並びに当時の商業について

ここでは、日本や世界の歴史と対照させながら、中国の明代、清代について紹介した。1492年にコロンブスがアメリカ大陸を「発見」し、1498年にはバスコ・ダ・ガマがアフリカ南回り航路によってインドに到達した。そして1549年にはフランシスコ・ザビエルが鹿児島にやってきて、日本にキリスト教を伝えた。これらはいずれも中国では明代におけるできごとであった。明代当時の世界は、きわめてグローバルな結びつきを持っていたことが知られる。かくして新大陸からヨーロッパにもたらされた大量の銀が、絹や陶磁器などの見返りとして、中国に集中することになり、明代末期の中国は、好景気の時代を迎えた。文化の成熟もまた、こうした経済的活況を背景にしている。

明末当時全国規模の流通をになって活躍した商人に、安徽出身の新安商人があった。彼らは明清両代を通じて江南経済を牛耳り、その故郷である歙県には、白壁の豪壮な屋敷が今日でも数多く残されている。新安商人は商売ばかりでなく、一族の子弟の教育にも力を注ぎ、一族から科挙に合格して高級官僚となるものが輩出することによって、官界と経済界の両面にわたって力を持つことになった。

明代の文学としては、唐代の李白、杜甫のような大詩人こそあらわれなかったが、現在でも広く知られる『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』などのいわゆる白話小説（口語で綴られた小説）があらわれたのがこの時代のことである。古典的な詩文と比べて、より通俗的な白話小説においては、商人をはじめとする庶民がより多く登場するようになったのも、この時代の文学の重要な特徴である。

## (二) 明清時代の文学作品に見られる商人について

ここでは、明末蘇州の文人馮夢龍（1574年～1646年）が編んだ短篇白話小説集「三言」（『古今小説』＝『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』。これらからの選集『今古奇観』には日本語の翻訳もある）の中から、商人が登場する三作品を取り上げて紹介した。

『古今小説』巻一「蒋興哥重会珍珠衫（蒋興哥が重ねて珍珠衫に会うこと）」は、代々広東に行って商売をしていた湖広襄陽府棗陽県の商人、蒋興哥が主人公である。蒋興哥は美しい妻三巧児と結婚し、仲むつまじく暮らしていたが、生活のため、妻を家に残して広東へ商売に出かけていく。一年後には帰るといった夫は、一年が過ぎてもなかなか帰ってこず、三巧児は、夫の帰りを待ちわびて二階の窓から通りをうかがうようになる。三巧児の姿を見た新安商人の陳商は、彼女に一目惚れしてしまう。陳商は薛婆に金を与えて取り持ちを依頼する。三巧児は薛婆の奸計にはまり、陳商と関係を持つに至る。陳商との別れにあたり、三巧児は蒋家の家宝である珍珠衫を贈る。たまたま蘇州で陳商と知り合った蒋興哥は、陳商が見せた珍珠衫によって、妻の不貞を知る。郷里に戻った興哥は、何もいわず三巧児を離縁する。三巧児が離縁されたことを知った陳商は、ショックで病気になる、死んでしまう。陳商の死後の始末のためにやってきたその妻、平氏が蒋興哥と再婚する。さらに後日談もあるのだが、ここでは他人の妻を奪ったものは、自分の妻を取られるという因果応報、勧善懲悪が話の中心といえる。この話の中で、新安商人は、好色な人物として描かれている。

『警世通言』巻三十二「杜十娘怒沈百宝箱（杜十娘が怒って百宝の箱を沈める）」。新安商人の孫富は、隣の船にいた李甲が連れていた名妓杜十娘に一目惚れし、金にあかせて、李甲に杜十娘を譲るよう説得する。自分が孫富に譲り渡されることを知った十娘は、携えていた財宝を川に投げ捨て、自分も身を投げて自殺してしまう。ここでも新安商人は、好色な人物として描かれている。馮夢龍が生きた蘇州は、新安商人の重要な拠点の一つであったが、羽振りのよい新安商人に対して、あまりよい思いを持っていなかったのかもしれない。

『醒世恒言』巻三「売油郎独占花魁（売油郎が花魁を独占する）」は、しがない油売りの秦重のまごころが通じ、名妓王美娘の心を射止め、結婚する物語。なかで、はじめて王美娘を見た秦重が、美娘との一晩の遊興費用が銀十両であると聞いて、おのれの貧しさに悩みながらも、「明日を手始めに、毎日元手だけを差し引いて、余りを少しずつ積み立てていく。一日に一分ためても、一年では三両六銭になるから、わずか三年で事は成就する。もし一日に二分ためれば、たったの一年半だ」と決意するところなどからは、商人の自信のようなものが伝わってこよう。また、最後に美娘の心を射止めるのが、高官や大商人ではなく、油売りのまごころであったという点も重要なポイントである。

## (三) 明清時代の文学と商業との関係について

この部分は、当日時間の関係で詳しく説明できなかったが、(一) 明末以降、出版産業が発達し、商品としての文学作品が数多く生み出されることになった。白話小説の出現と隆盛はこうした背景

をぬきにしては考えられない。(二) 明清両代を通じて、大商人の中には、学者文学者のパトロンとして知られる人物も数多くあらわれた。鮑廷博の『知不足齋叢書』なども、こうした背景によって、刊行された叢書である。明清両代の文学には商業との深い関わりを見ることができる。

平成24年6月15日 於 図書館ホール

